

書評

Koji Hirose,

Problématique de l'institution

dans la dernière philosophie de Maurice Merleau-Ponty :

Événement Structure Chair,

Numéro spécial des Études de Langues et de Cultures, N° 2.

Institut de Langues et de Cultures Modernes, Université de Tsukuba,

mars 2004.

山倉裕介

はじめに

メルローポンティ⁽¹⁾研究にあつて、制度化という問題に早くから意欲的に取り組んでいるのが廣瀬浩司である。本論文「モーリス＝メルローポンティ晩年の哲学における制度化の問題性—出来事・構造・肉—」⁽²⁾は（現段階で）廣瀬の最も大掛かりな研究である。もともとは、「モーリス＝メルローポンティ晩年の哲学における制度化の問題性 *Problématique de l'institution dans la dernière philosophie de Maurice Merleau-Ponty*」という表題で1994年にパリ第一大学に提出された博士論文である。そこに幾らかの修正が施され、2004年に筑波大学から刊行されたのが当該文献である。

第一部「制度化の現象学」・第二部「制度化の四つの秩序」・第三部「制度化と問い掛け」の三部から成る、全395頁の大著である。分量もさることながら、パリの国立図書館に所蔵されていたメルローポンティの草稿⁽³⁾の読解が試みられている（主に第二部）ことから分かるように、内容面でも先駆的・意欲的な論文である。制度化と言うと、コレージュ＝ド＝フランスで1954年から翌年にかけて行われた講義、「私的・公的な歴史における《制度化》」が有名である。この講義の概要は早くから知られていた。だが、「講義控え」が出版されたのは2003年のことである。つまり、制度化講義の全貌が公けにされるのとほぼ時を同じくして、制度化についての廣瀬の研究論文が刊行されたことになる。制度化という比較的目新しい論点に取り組むに際して手引きとなる、非常に有益な論文である。但し、問題点もある。全てを確認した訳ではないのだが、評者が原典と突き合わせてみた限りで、引用箇所を廣瀬はしばしば間違っており、また引用内の語句を時に誤記している。

残念ではあるが、この点を指摘せざるを得ない。

本論文の目的に関して、序文の冒頭で次のように述べられている。

この研究の中で、モーリス=メルロー=ポンティの思惟（とりわけその《晩年の》思惟）を了解するためには制度化の問題性が重要であることを強調しつつ、彼の哲学諸文献を私達は読み直す積もりである。(PIDP, p. 6)⁴⁾

制度化の問題に着目しながらメルロー=ポンティの著作等を読み直し、彼の晩年の思惟を了解するための手掛かりを求める、というのが基本的な姿勢である。このための方法として、二つの方向性が序文の最後で示される。すなわち、一つには、制度化ということ言われている内実を検討することである。もう一つには、メルロー=ポンティの哲学における制度化の役割を考察することである。大枠で捉えるならば、本論文の第二部で試みられているのが前者の方向性であり、第一部と第三部を通じて行われているのが後者の方向性である。

本稿では、後者の方向性（つまり、メルロー=ポンティの哲学における制度化の役割）に焦点を合わせて廣瀬の議論を紹介する。と言うのも、制度化という考え方の位置付けに評者自身に関心を持っているからである。限定された範囲ではあるが、これを批判的に検討することを通じて、廣瀬の考え方とメルロー=ポンティの思索とを浮き彫りにしてみたい。

1. 制度化の役割について

メルロー=ポンティの哲学における制度化の役割、という方向性に沿って廣瀬の議論を紹介するのだが、（この方向性に絞っても）本論文を網羅的に扱っている余裕がない。そこで、幾つかの論点を掻い摘んで取り上げることにする。

1.1 制度化の定義について

制度化という用語は未だ一般的な用語ではない。廣瀬がこれをどのように捉えているのか、まずは確認しておく。

制度化の定義ということでは、「講義概要」の次の件が最も能く纏まっている。

制度化ということここで理解されたのは次の点である。まず、持続可能な諸次元を或る経験に付与する諸々の出来事であって、その諸次元との関係で一連の他の諸経験まるごとが意味を持つ筈であると共に思惟可能な一つの筋道や一つの歴史を形成する筈である、経験のそうした出来事のことである。或いはまた、私の内に或る意味を

沈殿させる *déposit* (*déposer*) のだが、それも遺物や残滓としてではなく続くものへの訴え掛けや或る将来の要求として沈殿させる、そうした諸々の出来事のことである。(RC, p. 61)

廣瀬の場合は一層簡潔に、この件の「持続可能な諸次元を或る経験に付与する諸々の出来事」という部分を制度化の定義とする(PIDP, p. 8 参照)。要するに、意味を生じさせ沈殿させる元となる次元を与えるような出来事のことである。

1.2 『行動の構造』における制度化

廣瀬によると、メルロー・ポンティ最初の著作である『行動の構造』において既に制度化の考え方が見受けられる。次の件が引かれる。

批判主義では、…(中略)…等質的な悟性の或る活動が認識の端から端まで展開されるのに対して、私達の眼に映ったそれぞれのゲシュタルト化(形式化) *mise en forme* というのは反対に、諸観念の世界における一つの出来事のようなもの、つまり新しい弁証法の制度化や新しい現象領域の開けであり、先行するものを孤立した契機として廃棄する一方でそれを保存し統合する新しい構成層の設立であった。(SC, p. 224)

ここで、「新しい弁証法の制度化や新しい現象領域の開け」(強調は評者)は「諸観念の世界における一つの出来事」・「先行するものを孤立した契機として廃棄する一方でそれを保存し統合する新しい構成層の設立」と言い換えられており、『講義概要 コレージュ＝ド＝フランス (1952-60 年)』中の先に挙げた一節に通じるものである。ただし、『行動の構造』からのこの引用箇所が置かれている文脈を考慮する必要がある。すなわち、意識の側から物質・質料に形を与えるものとする批判主義的な心身論に対して、心身の間を弁証法的な統合として捉える考え方を示している中で、先の件のようなことが言われているのである。

この点を踏まえ、批判的な観念論の縁に制度化の問題性を現われさせた、と廣瀬は述べている(PIDP, p. 341 参照)。批判的な観念論の階層的且つ等質的な体系を逆転させることにメルロー・ポンティの主眼は置かれていた訳で、「諸観念の世界における出来事」としての制度化はあくまでも副次的なものに過ぎなかった。それでも次のように言われる。

制度化という考え方の“定義”を直接的に予示することで、《諸観念の世界における》偶然的な《出来事》だと、すなわち構成的な分析の等質的な統一性の内部の偶然的な

《出来事》だと制度化は自らを定義する。(PIDP, p. 29)

このように読み取れる以上、少なくとも制度化的な考えを『行動の構造』の時点でメルロー・ポンティが既に関心を持っていた、と看做すことが出来るだろう。

廣瀬によると、制度化の問題性により、メルロー・ポンティの現象学の基本的な諸問題に関連付けることが可能になる(PIDP, p. 39 参照)。主題ということでは、歴史・自然・象徴主義・受動性といった問題が捉え直される。また方法ということでは、発生・還元といったところが注目される。こうして、取り扱う主題にしてもその方法にしても、『行動の構造』において制度化の端緒が開かれることになる。

1.3 『知覚の現象学』—暗黙のコギトと語られるコギト

本論文では、『行動の構造』において既に制度化の問題性を見出せることを指摘した後に、当然のことながら、『知覚の現象学』から『見えるものと見えないもの』への展開が記述される。大雑把な傾向としては、『知覚の現象学』で提起された問題、或いは不十分にしか解消されなかった問題がまず列挙され、『見えるものと見えないもの』でのそれらの問題の捉え直しが描かれる。表題にもある通り、本論文では晩年の哲学の方に重点が置かれているため、『見えるものと見えないもの』の方にどうしても力が込められることになる。

幾つかの問題が取り上げられている中で、ここではコギトの問題を採り上げる。第一部第三章第二節「^レコギト」、及び象徴の制度化」を検討してみる。メルロー・ポンティの暗黙のコギトに関して、次のような指摘を廣瀬は行う。

暗黙の^レコギトと語られる^レコギトの関係について、『知覚の現象学』の中でメルロー・ポンティは二つの観点を採用しており、それらを相互に含意することで沈黙と言語の調停が可能になっていた。(PIDP, p. 79)

「^レコギト」についての二つの観点が紹介される。第一の観点はいわば考古学的なものである。ここで重要なのは、「諸々の歴史的な堆積物の下に、暗黙の^レコギトが身を据えている根源的な層を再発見すること」(PIDP, p. 80)である。暗黙のコギトと出会うのでなければ、語られるコギトにはいかなる意味も見出されない、とされている(PP, pp. 460-461 参照)ことから、暗黙のコギトは語られるコギトの可能性の条件だということになる。そして、「既に制度化された言語の下に暗黙の^レコギトが見出すのは、無言の言語或いは知覚の《原文 texte》である。したがって、事物自体の意味の現実存在を想定するに至る」(PIDP, p. 80)こ

とになる。この第一の観点からすると、知覚される世界は自然な原文であって、何ごとか意味深いことを言わんとしていることになる。だがこのような暗黙のコギトでは、自然な世界の沈黙の中に主体は閉じ込められるようだ。前言語的な意味で他者と意思疎通するためには、自己と自己の合致を行う必要があり、一種の呪いだとか神秘といった形でこれは行われることになる。そこで、沈黙の発話或いは正統な発話と（そこから派生する）経験的な発話或いは二次的な発話の間に階層が設けられることで、意思疎通が保証される。

第二の観点では、身体的な所作と言語的な所作の間の厳密な並行論というものが設定される。他者の所作を私が了解するのに、自然な世界の構造の中で私の側でその意味を捉え直す、というのと同様に、言語的な世界の中で他者の発話の所作的な意味作用に私は合流する、という訳である。だがここから新たな問題が生じる。言語的な所作において、自然の役割を文化が果たしたり、発話が堆積して相互主観的な既得物を構成したりするのならば、自然な所作と言語的な所作の関係が問われることになる。前-言語的な秩序においては言外のこととされていたものを発話が明らかにする、つまり、自然な言語の真理を人間的な文化が完全に明かす、というのでは、（並行論と言いながらも）暗黙の裡に自然と文化の階層関係を持ち込んでいることになるのではないか、との疑問が生じる。

コギトについての二つの観点を以上のように纏めた上で、その難点を廣瀬は指摘する。一つには、「暗黙の「コギト」つまり自己の自己への現前は実存そのものであって、あらゆる哲学に先立つ。だがその「コギト」が自らを知るのは、それが脅かされるような諸々の極限状況においてでしかない」(PP, p. 462)とあるように、制度化された言語の背後に沈黙した起源を考古学的に見出そうとしても、特権的な瞬間にしかそうした起源は露わにならない、という点である。もう一つには、知覚と言語の並行論をメルロー・ポンティは提起しつつ、自然と文化の古典的な区別に至る、という点である。いずれの難点でも、沈黙と言語の間、自然と文化の間に切りのない往復運動が確認される。

こうした対立する二項を如何に調停するかが問われる中で、一連の二次的な範疇をメルロー・ポンティは導入する、として、廣瀬は次の二点を指摘する。第一に、知覚作用と言語作用の中間の位置を占める絵画表現において、意識とは別の生の中に閉じ込められたままのものを画家が捉え直して視覚対象へと変換するように、既に制度化された言語の諸資源を或る黙した思惟が自ら表現する（或る新規の用法へと曲げる）。このように考えれば、可感的な諸記号に頼ることは暗黙のコギトの弱点になるのではなく、むしろ諸記号はその本質的な要素となる。「暗黙の「コギト」が「コギト」であるのは、その「コギト」が自分で自らを表現した場合だけである」(PP, p. 463)ように、「メルロー・ポンティの「コギト」とは、形を象る機能 *la fonction figurative* を負った「コギト」のことである」(PIDP, p. 82)、とされ

る。それ故第二に、表現一般が残した航跡を指すのに、「象徴 *symbole*」・「標徴 *emblème*」といった語をメルローポンティは好んで用いる。「制度化する」という語の周辺で「象徴」・「標徴」が用いられている例から、「象徴主義の現象学的な発生という問いが提起されるし、自分自身の諸標徴を制度化する主体として《制度化する主体》が了解されることになる」(PIDP, p. 83)。

『知覚の現象学』におけるこうした議論の素朴さとして廣瀬が指摘するのは、諸象徴への依存の必然性を暗黙のコギトは含意する、という点である。これはつまり、知覚的な意味から言語的な意味への推移を『知覚の現象学』は主題化しないし、真理からの後退運動というものをこうした推移が含意している可能性にも触れない、ということである。そして、次のような疑問を廣瀬は発する。

制度化という考え方の目的の一つはこうした推移の主題化である、もっと詳細に言うなら、象徴的な世界における知覚的なものと言語的なものの絡み合いの主題化である、と考えられるのではないか。(PIDP, p. 85)

すなわち、『知覚の現象学』で主題化されなかった点（知覚的な意味から言語的な意味への推移）を補って問題としていく、という所に制度化が位置付けられる訳である。

1.4 『見えるものと見えないもの』—超反省

『知覚の現象学』では、反省とは非反省的なものについての反省であり、非反省的なものがそのようなものとして明らかにされるのが反省だ、とされる。そして、反省と非反省的なもの間のこうした円環的な関係は「基づけ」の関係とされる。これに対して、『見えるものと見えないもの』で言われる「一種の超反省 *surréflexion*」(VI, p. 60)とは、円環性の内的な構造を明らかにしようとするものことである⁽⁶⁾。『見えるものと見えないもの』で「超反省」が持ち出されてくる経緯を考えてみたい。第三部第二章第一節「知覚的な信憑と超反省」を検討してみよう。

廣瀬によると、「世界の超越について超越として反省する」(VI, p. 60)という意味での超反省としてメルローポンティが明らかにしようとしているのは、全体性の先取りである。それも、可知的な全体性の概念的な先取り（観念論）と、経験的な認識の盲目的な前進（実在論）の間の中間的な立場が目指される。これがすなわち、前現実存在的な全体性の前反省的な先取りというものである。つまり、予見不可能な諸出来事との出会いを排除しない先取りである(PIDP, pp. 287-288 参照)。

問われているのは、超越的かつ前現実存在的な世界との私達の接触を制度化する超反省で以って、概念的な観念化というものに訴えることなく、件の接触を表現出来るのは如何にしてか、ということである。『知覚の現象学』での問題に引き付けて考えるならば、暗黙のコギトと語られるコギトの間の関係の問題である。

『知覚の現象学』での問題が『見えるものと見えないもの』で捉え直される訳だが、廣瀬によると、『知覚の現象学』との差異は明らかである。『知覚の現象学』では、沈黙の世界への回帰を要請することからメルロー・ポンティは始めていた（ただし先に確認した通り、自らの諸標徴を暗黙のコギトは制度化する、と後で付け加えられていた）。これに対し『見えるものと見えないもの』で直ちに主題化されるのは、沈黙の世界から表現の世界への推移であり、つまりは、哲学的な反省の可能性そのものを賭ける推移である。『知覚の現象学』での解決が曖昧なのは、本来的に意味を授けられた《自然な原文》なるものの現実存在を主張するからである。『見えるものと見えないもの』ではこの考え方自体が疑問に付され、超反省で以って世界に何ごとかを語らせる、ということになる(PIDP, pp. 288-289 参照)⁽⁶⁾。

このように考えると、無言の世界を哲学的な言語が表現するのか、知覚的な信憑の方が自己超出して表現に至るのかを問う必要がなくなる（つまり、暗黙のコギトを語らせるのか、暗黙のコギトが語るようになるのか、が問題ではなくなる）。哲学者が自分で自らを表現することで、世界との出会いを表現することになる。つまり、自然的な世界と反省的な観念化の編み合わせの中にこそ、哲学的な言語の可能性が存するのである。

制度化するものである哲学的な言語が世界との出会いを表現し、その表現が制度化される限りで、それとの隔たりとして原初的な沈黙の世界は現われる。このようにして辿られる道筋（履歴）を世界の中に読み取ることが出来るようになる。廣瀬によると、超反省ということでメルロー・ポンティはここまで達することになる。

2. 評価と批判

1 節では、制度化の問題を扱った浩瀚な論文の極く一部を紹介してきた。その限られた部分についてはあるが、ここでは評価と批判を行いたい。

まず、1.1 節・1.2 節で紹介したように、制度化という考え方の端緒を『行動の構造』に廣瀬は求めている。もちろん最初は副次的な位置付けに過ぎなかったにせよ、批判的な観念論に対置される形で制度化が導入されたのである。しかも、後に定式化されるのとほぼ同様に、事実の積み重ねから意味が発生する出来事、といった意味で制度化が用いられている。ここで、『行動の構造』という極く初期の段階から制度化の考え方が認められるという点ばかりではなく、この考え方が何ら特別視されていないことも重要である。メルロー

ポンティの用語法からして、「制度化」という語で以って殊更に特異なことが表されている訳ではない。事実から出発しての意味の生成というのはメルロー・ポンティが常に追究していた主題であり、その方法論に着目する時に「制度化」という言い方を用いているのだと評者は考える。

他方で、評者としては納得のいかない点もある。その一つは Cogito の捉え方である。暗黙の Cogito と語られる Cogito について、1.3 節に纏めたような指摘を廣瀬は行っている。評者が違和感を覚えるのは、暗黙の Cogito と語られる Cogito が二つの項の如く捉えられている点である。確かに、「語られる Cogito の向こう側に、言明や本質の真理へと変換された Cogito の向こう側に、暗黙の Cogito つまり私による私についての試験というものがある」(PP, p. 462)、といった関係に両者はある。だがこれは二項関係ではない。廣瀬自身も引いている通り、「暗黙の「Cogito」が「Cogito」であるのは、その「Cogito」が自分で自らを表現した場合だけである」(PP, p. 463)。これはすなわち、Cogito が表現されて語られる Cogito になる限りで暗黙の Cogito が認められる、ということである。そして、語られる Cogito が顕現している限りで、暗黙の Cogito は表現されているのである。これもまた廣瀬自身が引いているのだが、「暗黙の「Cogito」つまり自己の自己への現前は実存そのものであって、あらゆる哲学に先立つ。だがその「Cogito」が自らを知るのは、それが脅かされるような諸々の極限状況においてでしかない」(PP, p. 462)。死に瀕したような極限状況を除いて、暗黙の Cogito がそのものとして現われることはまずあり得ない。飽くまでも、現われるのは語られる Cogito である。語られる Cogito が暗黙の Cogito なのであり、暗黙の Cogito は語られる Cogito である。ここに二項対立はない。或いは「形を象る機能を負った「Cogito」」という仕方でこの点を廣瀬は言わんとしているのかも知れないが、結局のところ、諸象徴への依存の必然性を暗黙の Cogito が含意する、という点を『知覚の現象学』の素朴さとして指摘するに至る。しかし、個別的な思惟の証人となる「非-存在の或る隠れ場所」(PP, p. 458)・「或る「自己」」(ibid.) (つまりは、「私は思惟する」一般或いは暗黙の Cogito) は背後に別のものを要しない究極的な意識 (つまりは現在の意識) とされている(PP, p. 485 参照)。暗黙の Cogito のこの究極性を弁えずに廣瀬は議論を進めている、と評者には見えるのである。

『知覚の現象学』における暗黙の Cogito についての捉え方が適切ではないのだとすると、1.4 節で紹介した超反省についての廣瀬の議論も評者には違って見える。超反省というのは、「世界の超越について超越として反省する」(VI, p. 60) ことであり、前現実存在的な全体性の前反省的な先取りを明らかにすることである。この超反省で以って沈黙の世界に語らせる、それも、哲学的な言語による世界の表現が制度化されることで沈黙の世界が現われる、

ということである。廣瀬によると、『見えるものと見えないもの』で新たに示された議論なのだが、評者の見るところでは、非反省的なものについての反省（『知覚の現象学』で言われる反省）の範囲内に収まっている。すなわち、超反省と名付けられてはいても、沈黙の世界という非反省的なものをそれとして反省している限りでこれは反省に他ならない、と評者は考えるのである。

最後に、「制度化の位置付け」について言及しておく。『行動の構造』に始まり『見えるものと見えないもの』に至るメルロー・ポンティの思索を見通して、何らかの形で制度化が常に問題とされてきた、という廣瀬の着眼には評者も賛同出来る。しかし、『知覚の現象学』（本稿で採り上げたのはコギトの問題）に何らか素朴な所や不十分な所があって、これを補完するような位置に制度化を置くことには評者は賛成出来ない。と言うのも、『知覚の現象学』における暗黙のコギトの議論の射程には制度化が入っており、暗黙のコギトと制度化とは直接に繋がるものと考えられるからである。すなわち、人生において誕生以来積み重ねられてきた経験のまとまりが暗黙のコギトであり、そうした経験の積み重ねに対して新たに生じた出来事の意味付けが為されるのが制度化である(PP, pp. 465-466 参照)。もう一步踏み込むならば、実存そのものと実存の意味付けという形で暗黙のコギトと制度化は密接に関わるのである。こう考えると、制度化ということで何か新しい概念をメルロー・ポンティが持ち出してきたというよりは、彼の現象学の極めて本筋となる所に制度化は位置付けられることになる。

おわりに

「はじめに」でお断りしたように、廣瀬の大部の研究論文を紹介するにあたり、評者の関心に沿った一部分を取り上げる形を採ってきた。限られた論点についてはあるが、評者の意見も併せて示したことで、メルロー・ポンティの言う制度化という問題の根深さが却って明らかになったのではないかと、そしてその制度化の問題に取り組む廣瀬の努力の一端を示せたのではないかと、思う。本稿では全く触れられなかった箇所にも、この研究論文には興味深い論点が数々盛り込まれていること付言しておきたい。

註

- (1) 「Merleau-Ponty」の片仮名表記は「メルロー・ポンティ」とする。つまり、連結符 *trait d'union* 「-」をそのまま用いて表記する。本稿で「=」を充てるのは、外国語を片仮名で表す場合の分かち書き部分とする。また、単語（主として名詞）を並置する場合に「・」を用いる。
- (2) 廣瀬のホームページ(<http://www.asahi-net.or.jp/~DQ3K-HRS/>)から本論文を入手することが出来る。本稿では、引用に際して「PIDP」と略記する。また、引用文は評者による和訳である。
- (3) 廣瀬が研究していた当時には草稿であったものが、コレージュ＝ド＝フランスでの講義控えという形で近年になって公刊されてきている。*La nature Notes, Cours du Collège de France* (Éditions du Seuil 1994,

Dépôt légal: mars 1995), *Notes de cours 1959-1961* (Éditions Gallimard 1996, Dépôt légal: octobre 1996), *Notes de cours sur L'origine de la géométrie de Husserl suivi de Recherches sur la phénoménologie de Merleau-Ponty* (sous la direction de R. Barbaras) (Presses Universitaires de France 1998, Dépôt légal: février 1998), *L'institution · La passivité Notes de cours au Collège de France (1954-1955)* (Éditions Belin 2003, Dépôt légal: janvier 2003).

(4) 引用箇所において、傍点部は原文斜字体、鉤括弧内は原文大文字、引用符 (《》) は原文のまま。また、引用後の括弧内は出典・頁。以下同じ。

(5) 超反省について『見えるものと見えないもの』で述べられていることを纏めると、次のようになる(VI, p. 60 参照)。超反省とは、①その反省自体及びそれが導入する諸変化を考慮するものであり、②荒々しい事物・知覚を見失いはしないであろうものであり、③荒々しい事物・知覚を消し去らないであろうし、その繋がりを断ち切りもしないであろうものであって、③' 反対に課題として自らに与えるであろうのは、④荒々しい事物・知覚について考えることであり、⑤世界の超越について超越として反省することであり、⑥所与の言語に内属する諸語の意味作用の法則に従ってそれらについて語るのではなく、⑥' 諸事物が言われた事物に未だなっていない時に、それら事物と私達の無言の接触を(諸意味作用自体の向こう側で)表現するのにこの諸意味作用を用いる、という恐らくは困難な努力によってそれらについて語ることである。

(6) 廣瀬が引用するのは次の一節である。「したがって、自らが発見するものをその反省が推測してはならないとすると、そしてまた、諸事物の中に見出す振りをその後にする筈のものをそこに置くことを反省が余儀なくされてはならないとすると、世界への信憑を反省が中断するのはその世界を見るためだけでなく、私達にとって世界となることでその世界が辿った道筋をその中に読み取るためだけでなく、私達と世界との知覚的な結び付きの秘密を世界そのものの中に、反省は探求しなければならないし、前論理的なこの結び付きを言うために諸々の語を反省は用いなければならないが、それらの語の予め確立された意味作用に従う訳ではない。そしてまた、世界を支配する代わりにその世界に反省は没頭しなければならないし、世界を思惟する予めの可能性というもの(世界に対する私達の統制の諸条件をその世界に前以て課するであろう)の方へと遡及する代わりにその世界が在るがままにそちらの方へと反省は下って行かななければならないし、反省は世界に問い掛けなければならないし、私達の問い掛けが世界において集めさせる参照関係の森の中に反省は入り込まなければならないし、結局のところ、沈黙の中で世界が言わんとしていることを反省がその世界に言わせなければならない」(VI, p. 60)。

文献

Merleau-Ponty, M. (1942). *La structure du comportement* (Presses Universitaires de France, cinquième édition 1963)

[SC]

—— (1945). *Phénoménologie de la perception* (Gallimard, Dépôt légal: 3e trimestre 1981) [PP]

—— (1964). *Le visible et l'invisible* (Gallimard, Dépôt légal: février 2001) [VI]

—— (1968). *Résumés de cours: Collège de France 1952-1960* (Gallimard, Dépôt légal: 4e trimestre 1981) [RC]

[明治国際医療大学非常勤講師・哲学]